

森
鷗
外
作
品
集
第
四
卷

昭
和
出
版
社

森鷗外作品集第四卷

昭和四十年十月三十日発行

定価三百八十円

著者 森 鷗 外

発行者 八 木 敏 夫

印刷者 河 野 見 木 夫

発 行 所

昭 和 出 版 社

東京都千代田区神田神保町一ノ四五

森鷗外作品集

第四卷

藤新繪

冒險といふ詞は、*aventure* を故人森田思軒が譯して、始めて使つたのだと、本人の直話であつた。なる程多くの場合には好く嵌まつてゐる。

併し深山に入つたり、荒海に出たりするやうに、危険が伴はなくては、アワンチュウルが成り立たないと云ふものではない。*Gautier* の小説に、毎朝けふこそは戀人を拵へようと思つて飛び出して、巴里中を走り廻る青年の事が書いてあつた。それから *Maupassant*

だつたかと思ふ。間違つたら御免なさい。田舎に住んでゐる、極眞面目な家の細君が、一生に一度是非浮氣がして見たいと思ひ立つて、わざわざ汽車に乗つて巴里へ出る話があつた。それこそ *à l'aventure* に或る美術商の店に這入ると、番頭と話をしてゐる客がある。番頭の口から其客の名が漏れる。世に聞えてゐる大家である。細君は奇貨措く可しと、藪から棒に話し掛ける。大家先生不精不精に返事をする。それに構はずに物を問ふ。物を頼む。絡み附いて離れない。不愛相は持前の先生ではあるが、巴里の石疊を靴の裏に踏んでゐて、女に物を問はれて答へずにはゐられない。頼まれて聴かずにゐられない。絡み附かれて振りほどくことは出来ない。とうとう料理屋に連れて行かれる。珈琲店や舞踏場を引き廻される。次第に夜が更けて来る。先生がもう此邊でお暇を申したいと云ふと、「ど

うぞあなたの atelier^{アトリエ}へお連れなすつて下さい」と出る。不精不精に承諾する。「御覽の通り一人ものので、寢臺も一つしかありません。」「どう致しまして。なる丈お邪魔にならないやうに、小さくなつて臥せります。」「女は流石に恥かしいので、顔を隠してちこまを。先生は不精不精に樺太の半分で我慢して、境界線^{くわいせん}を踏えない限り、なる丈樂に仰向になつて、手足を踏み伸ばして、忽ち高艀^{いぐさ}で寐てしまふ。先生の寐顔は頗る醜い。先生の太つた腹は、呼吸の度に波を打つ。女は少しも寐られずにゐて、窓の白らむを待ち兼ねて逃げ出す。浮氣をして見ようと思つた細君が、此失敗に懲り懲りして、直ぐに眞面目な生活に戻つたと云ふのである。

かう云ふアワンチュウルの心持は、若い人には、男と女とを問はず、多少ある。花見に行く。芝居に行く。

花を見たり、藝を見たりするばかりではない。人を見る。それよりは人に見て貰ふ。此心持は始終附いて廻る。併し花見や芝居見物は、改めて身支度をして行く處である。それと違つて、學校や勤務所の往復にも、若い人には此心持がある。否。外へ出るまでもない。窓から往來を見出だしてゐる娘にも此心持がある。部屋にゐて給仕に來る小間使を待つ息子にも此心持がある。

それが餘りにこうして來ると、一寸閤を跨いで外へ出るのが、Don Quixote^{ドン・キホーテ}が武者修行の門出をすると同じになる。懷に金があるときは、親が高利貸にでも苦められてゐる、美しい娘に出逢ひたいと思ふ。金なんぞはなくても、責めて身を投げようとする娘でもゐたらと、橋の袂や川岸を見て通る。

アワンチュウルの心持は誰にもある。隨つて其心持

がこうして來るといふことが、誰の身の上にもあり得る。物臭くて、朝顔も洗はずに學校に行く青年や、八口の綻びを一週間も縫はずに着てゐる女學生が、柄にない夢を見て歩いてゐる。さういふのは、却て同情に値する。此中に一種の *romantic* が認められる。憧憬の憧憬たる所以は、此邊に存するかも知れない。

これに反して、兎角魚を羨むよりは網を結ぶが好いと云ふ風に、萬事 *réaliste* に考へて、自分の體を人に見て貰ふ品物として取り扱ひ、平生してゐる事が、凡てアワンチュウルの作戦計畫だとなると、罪が深い。

その罪の深い連中に、佐藤君と云ふ先生がある。美術の看板を出してゐる理髮店の定得意で、衣類や持物に凝ること甚しい。そんなら今どんな着物を着てゐるか云ふに、それを書く必要はない。なぜと云ふに、最近の雑誌「みつこし」を開いて見れば、そつくり分

かるからである。

ここに書くのは、此佐藤君が近頃經歷した事實である。

頃は春の花盛りの時であつた。此下へ直ぐに人の心も浮き立つと云ふやうな事を書けば、文章も思想も、遺憾なき月並の面目を呈露する次第である。併し事實がそれを許さない。櫻は咲いてもなかなか寒い。朝は山の手では、霜や氷を見る。やうやう日がさして來たかと思ふと、寒い風が西北から吹いて來る。振つて花見に出た人も、動もすればいぢけ勝ちで、たまた瓶詰正宗の附け景氣をして見るものがあつても、周圍に何等の波動をも及ばさない。男は吹き飛ばされまいと、片手を帽の庇に掛け、片手を外套の隠しに入れて行き過ぎる。女は二重入毛の大袖をばらばらに吹きこはさ

れたり、薄く巧みに搔き揃へた髪の左右を、離が翼を張つたやうに吹き開かれたりして、裾の翻へるのを氣にしながら行き過ぎるのである。

かう云ふ日の晩であつた。「花月」に宴會があつて、丁度電燈の附く時分に、幹事がどうぞお席へと挨拶する。待つてゐた客がぞろぞろと大座鋪へ出る。

坐布團がづらりと並べて、間々にはまだ烟草盆でない、火鉢が配つてある。嚴めしく儀式張つた席ではないと見えて、坐布團に番號や名前を書いた紙札なんぞは挟んでなかつた。

その爲めに、床の間の前の方では、席を譲り合ふ人が二三人あつたが、幹事らしい男の捌きで間もなく治まつた。

違へ棚の側の隅を、折り曲がつて五六人目の處に柱を背にして、佐藤君は据わつた。金縁の鼻目を掛け

た目で、膳を運んで来る藝者を見てゐた。

人を馬鹿にしてゐるやうな顔附の婆あさん藝者やら、近い過去に醫者の手を煩はしたのでないなら、近い未來に煩はすだらうと思はれる、血色の悪い、若い藝者やらで、どれと云つて佐藤君の目に留まる女もなかつた。

膳が出てしまつて、お酌の友禪が藝者の紋附きの間に交つて、銚子を持つて来る時であつた。少し遅れて來たものと見えて、先に膳を配つた仲間でない、一人の若い藝者があつて、これも銚子を持つて出て來た。

凄みのある丈が瑤瑤だとも云ひたいやうな際立つて美しい女である。銀杏返しに四分珠の釵を挿してゐる。着物は共縞のお召縮緬に、汐千狩の縫模様、對の下着と云ふ拵へで、お納戸地に白の摸様の金春式韓織の帯を締めてゐる。

一座をずつと見渡して、佐藤のゐる席から斜め向うになつてゐる、末座の客の前に据わつて、そこにゐたお酌と何か話をし出した。

佐藤は此女から目を放さない。視線は後れ毛のばら附いてゐる髪の下に、白くほの見える頭筋から、中肉の肩や背を傳つて、お太鼓に締めた帯の横に食み出した、緋縮緬の帯上げの下を、腰の廻りへさまよふのである。尤もこの汐干狩の女に向ける視線は、佐藤のばかりではないので、佐藤が目放さないのも、別に人の注意を惹く程ではなかつた。

客が吸物を吸つてしまつた頃であつた。酌をしてゐる藝者があちこちで二三人入り代つた。佐藤は今まで自分の前にゐた、氣の毒な程瘦せたお婆あさんが退いたと思ふとたんに、一直線に自分を狙つて、手に銚子を持つて来る女のあるのを見た。それが、別人でない、

汐干狩の女であつた。

汐干狩の女は、佐藤の前に膝をとんと匍いた。そして意外にもかう云つた。

「あら。暫く。」

佐藤は内心大いに驚いた。そしてその驚きを極力包み隠さうと努めた。佐藤の爲めには、かう云ふ不慮な出来事は、丁度軍隊の指揮官が部下の大勢ゐる前で、豫期してゐない情報を得た時のやうなものである。

シユルプライズ エトナスマン
Surprise, étonnement, 凡そこんな場合に、普通の人間が平氣で顔にあらはす表情筋の運動は、闇から闇へ抑制してしまはなくてはならない。そして電光石火の如く、これに處する所以の道が講ぜられなくてはならない。佐藤の脳髓の中では、求心的機關と、遠心的機關とが、全速力を以て運轉した。

「やあ。どうも。まあ、一つ獻じよう。」

佐藤は膳の隅にあつた猪口ちぐくちを取り上げて、半分程あつた酒をぐいと呑み干して、女の前に差し附けた。部隊長なら、即時に決心を附けて、命令を發したやうなものである。そしてその命令は攻勢を取る命令である。女は猪口ちぐくちを受けた。女が臂かみの長さを隔てた所にゐる結綿むすわたのお酌を顧みる隙に、佐藤は女の膝の傍に置いた徳利を、素早く取つて酌をした。女は一口飲んで、猪口を下に置いた。

「あなたあれ切り手紙も下さらなかつたのね。随分だわ。」

此詞には第二の情報が含まれてゐる。あれ切りの「あれ」と云ふ語がそれである。あれは或る積極的の出來事を指示してゐる。併しその出來事は、佐藤の爲めには未知數である。Xである。勿論このXの内容は推知するに難たがからざるものである。併し此内容は横に

空間の上でどこにあるか。縦に時間の上でいつになつてゐるか。その交叉點を定めることは、全然不可能である。

佐藤は微笑の假面を被つた。そしてその假面を小櫃に取つて、その蔭で活潑に悟性を働かせてゐる。

最初に「人違へかな」と云ふ問が、佐藤の心の中で發せられた。

酷く肖た人と云ふものは随分ある。孔子は陽虎やうこと見違へられて捕へられたさうだ。こなひだもロンドンのSidney streetシドニー・ストリートでロシアの無政府主義者の潛伏してゐる家を包圍攻撃して、とうとう燒討にした跡で、灰の中から死骸は出たが、目ざした一人のMeyerと云ふ男は逃げ果せた。それを伊太利イタリヤで擱まへたと云つて、ヨロッパ中の諸新聞に電報が載せられた。ところが、その擱まへられた男は、獨逸ドイツの在郷下士官で、Peterの

寫眞が自分の顔に肖てゐるところから、友達と賭をして、わざわざ怪しい舉動をして、捕縛させたのであつたさうだ。併し人相書や寫眞と比べられて、間違へられる位の事はあるとしても、現在の場合はこちらに比して大なる懸隔がある。

一體所謂商賣人と云ふものは、お客の容貌を忘れないうやうに、記憶を訓練してゐる。一度逢つた人をも容易に忘れることはない。知てや汐干狩の女は「あれ」を閲してゐる。いづどこで閲したかは知らないが、あれ切りと云ふ詞で言ひ現してゐる時間は、遭を以て數ふるものか、月を以て數ふるものかと云ふ位が問題である。恐らくは年を以て數ふる時間ではあるまい。随つて容貌の全體にもせよ、一部分にもせよ、觀察者の記憶に障礙を與へる程變化する筈がない。假りに一步を離つて、最早何年かの星霜を経てゐて、容貌が多少

變化してゐたとしても、商賣人が「あれ」を閲した相手を忘れるといふことは殆ど無いと云ふことである。

佐藤君が嘗て年上の友達に聞いた話がある。二十年程前に、柳橋に小兼と云ふ藝者がゐた。或る時五十圓ばかりの金に困つてゐるのを、居合せた客が聞いて、出して遣らうと云ふと、小兼が縁もない人には貰はないと云つた。その時客が、云々の時、云々の所で、云々の事のあつたのを忘れたかと云つた。小兼がそれを聞いて、膝を敲いて、「ああ、さうさう」と云つたと云ふのが、當時名高い話であつたさうだ。それは忘れないう答の事を忘れたから、名高かつたのである。

そんなら記憶を訓練した商賣人でありながら、又左程月日が立つてゐないのに、見違へるやうに似た顔と云ふものがあるだらうか。雙胎兒には朝晩世話をしてゐる親が見違へるやうなものがあると云ふが、それは釋

い時の事である。二十を越すまでには、どんなに似た容貌でも、成長して來た間に、どこかに變つた所が出來てゐる。それだから徴兵に出る雙胎兒は折々あつても、隊で見分けに困ると云ふ話は聞かない。

そこでどうしても人違へとは思はれない。

若し人違へでないとすれば、なんであらう。初めて

見た人を、昔から知つてゐる人として取り扱ふ。かう云ふ行爲をなんと名付けたら好からう。一寸その詞に窮する。

日本語が豊富だとか貧弱だとか云ふ議論を、文藝の雑誌などで、折々讀ませられたことがあるが、かう云ふ行爲をはつきり言ひ現す詞は、日本語にはないやうである。

外國語で此場合に該當してゐる詞を求めたら、先づ *mystification* とでも云ふべきであらうか。ミステフィ

カシヨン。怪しからんわけである。此女の媚のある表情、愛敬のある音調で云ふのを聞けば、溫みもあれば柔みもある。今それを赤裸々の概念に翻譯して、ミステフィカシヨンと云つて見ると、乾燥無味で、剩へ刺のあるやうな毒々しいやうな處がある。怪しからんわけである。

なぜ此女はそんな事をするのだらう。なんの爲めにするのだらう。その對象として、特に此佐藤が選び出されたのは、抑又何故か。

作者が紙に書けば長くてくだくだしいが、實際これ丈の思慮は、佐藤君の腦髓の中を、非常な速度を以て通り過ぎたのである。そしてその總てが、佐藤君の被つた微笑の假面の背後に隠置せられてゐるのである。

佐藤君の思慮の中には疑惑もある、怪訝もある。併し佐藤君の爲めには、當面にこれに處すべき所以の道

は、唯一筋かないやうに思はれた。それは女に逆らはずに、自分の投げられた^{わざ}を勤めて、事の自然の發展を待つのである。最初に取つた攻勢を失はずに、決戦を避けて、隙の乗すべきものを見出すまで、攻撃を持続するのである。

これは最初に攻勢を取つた勇氣に不似合な、頗る臆病な策である。苟もミステフィカシオンだとまで、許いて穿つて考へたからは、佐藤君の取るべき道は、別に今一筋ある。この今一筋の道が慥かに合理的である。それは思ひ切つて、「もう好い加減にしろ、人を馬鹿にするな、お前は誰だ」と喝破してしまふのである。

併し佐藤君にはそれが出来ない。彼のミステフィカシオンらしい、苦い丸藥に被せてある、媚や愛敬の衣が妨害するのである。

佐藤君は笑談のやうでもあり、又笑談でないやうでもある、極めて要領を得ない顔をして、かう云つた。「實は手紙なんぞを遣るよりはと思つて、とうとう遣らずにしまつたのだ。詰まらないぢやないか。手紙なんぞ。」

「あら。それが薄情なのだわ。なんでももう書いてゐるのが間だるつこいやうで、大急ぎでポストに入れて來させて、やつと少し氣が落ち着く位でなくては、ほんとに思つてゐると云ふものではないわ。」

「まだそこまで修行が詰んでゐないのだ。」

「あなた好くそんな事が言へますのね。たと馬鹿にして入らつしやい。わたしあの時お話ししたやうになつちまふから。」

佐藤君は第三の情報を得た。「あの時」と云ふのは、前に時間上に定め兼ねた「あれ」の出來事に就いて、

その定め兼ねた時間を示したものに違ひない。その時
 間に汐干狩の女は或る「話」をした。しかもその話の
 内容は、未來に於ける此女の身の上の one possible
 を示すものであつたに違ひない。此ポツシビリテエは
 相手の男、即ち此佐藤にまさらはしい男が薄情であつ
 たときと云ふ要約の下に成立するもので、勿論それを
 色々に考へて見ることが出来る。死ぬる。尼になる。
 焼酎を飲む。役者を買ふ。外の人に引かせて貰ふ。
 これなどは、更に細別すると、本妻になると妾に
 なるのとある。更に更に細別すると、その rival の先
 生を色々に考へて見ることが出来る。Morgan のやう
 なアメリカの金持か。和製の金持ちか。會社員の色男
 か。盗坊か。官員様か。役者か。角力か。焼酎出され
 た女郎屋の亭主か。自然派の小説家か。帝國劇場の立
 作者か。醫者か。坊主か。哲學者か。手品使ひか。政

治家か。

佐藤君は自在に空想を馳騁させて、その競争者次第
 で、此汐干狩の女の姿の勝手に變る有様を、想像して
 見ることが出来る。引かせた男が外交官で、此女を巴
 里へ連れて行つて、Poiret に jupe courte を爲立てて
 せて、そいつを着せて、自動車の合乗をして Champs-
 Elysees を通つてゐるかと思ふと、忽ち相手が神田鎧
 藏君の様な相場師になつて、此女に待合を出させる。
 さうすると此女が同業の瓢家のお上にでもあやかつた
 ものか、膨脹的日本の象徴のやうにふくれ上がつて、
 黒縮緬の紋附の羽織を、風を振んだ帆のやうに着用し
 て、梯子段のあがりおりに息を切らしてゐる。

こんな想像に耽つてゐる佐藤君の右手の方で、突然
 どうま聲がした。

「いよ。艶福家。」

聲の主は頭が月題をしたやうに禿げて、顔の脂切つた大男の田中君である。

「ほんとにお安くないわねえ」と、それに合槌を打つたのは、田中君の前に据わつてゐた、鼻の尖つた、中婆あさんの藝者である。

お安くないは好いが、鼻尖りの藝者が、此詞と共に佐藤君の顔をちよいと見た目附が、ひどく佐藤君に不愉快を感じさせた。その目附は、面白がつてゐるやうな、可笑しがつてゐるやうな、そればかりなら好いが、なんだか少し氣の毒がつてゐるやうな目附であつた。その憐憫の分子が、何やら分らずに、佐藤君の感情を害した。

田中君と鼻尖りとの唱和と殆ど同時に、佐藤君の左手の方から、黄いろい、甲走つた聲で、かう云つたものがある。

「諸君。そこにゐるねえさんの襦袢の襟に、お目を留めて御覽なさい。お安くなさ加減がお分かりになりませう。」

かう云つたのは、色の蒼い、瘦せぎすの、目のぎとろつとした石坂君である。

あたり近處の五六人の目が、一時に汐千狩の女の襟に注がれた。藤鼠に白く細かい線で、圓いものが幾つも縫はせてある。見ることは見ても、誰にも石坂君の鬨言した趣意が分からないので、こん度はみんなが一時に眸を石坂君の方に轉じた。

その時石坂君は、狡猾らしい笑ひの皺を、ぎよろつとした目の周圍に寄せて、再び甲走つた聲を放つた。

「藤村繪。藤村繪。」

みんなはこれを聞いても、容易に分らない。Héridique の専門家、紋帳に通曉してゐる先生などは、當

世めつたに無いのだから、登り藤に下がり藤位は知つてゐても、三房の藤が眞中から、逆に縫ぬいれて袴はかま繪になつて、藤袴ふたばかま繪を形かたちづくと云ふことは知らない人が多い。みんな汐千狩の女の襟に縫つてある、圓いものを見直しはしたが、さて「それがどうしたのだ」と云つたやうな顔をして、又石坂君の方を見てゐる。

唯一人藤袴繪と聞いて、ぎくりとしたのは佐藤君自身であつた。藤袴繪は御自身の本紋だからである。

佐藤君はどうして此女が襟に藤袴繪を附けてゐるか分からぬながら、その鼻目金を装つた目は、縫墻ぬい様の細かい線たじを辿つて、それが自分の紋と同じであると云ふこと丈を確かめた。

彼時早し、此時遅し、石坂君は三たび甲走つた聲を振り絞つた。

「どうぞ佐藤君のお羽織の紋とお較べ下さい。」

佐藤君の兩隣の客は、「どれ」と云ひさま、左右から佐藤君の羽織の袖を引つ張つて紋の検査を始めた。

此處佐藤君は奴やつ風ふうの見えである。

それから袖の紋と襟の模様との比較研究が始らうとするところであつたが、生憎鼻突りのねえさんが、此座の最故こ參さんであると見えて、命いのちを傳へて踊りの組を造ると、汐千狩の女も踊らなくてはならないことになつて、比較研究の一方の對象たる襟が、遠く望むべくして迫り視るべからざるものとなつた。甞たゞに遠いばかりでない。先頃獨逸帝ドイツは自分の育てた雜種牛の寫眞の取れないのを歎なげじて、「Der Brest haelt sich nicht still」云つたが、その遠い藤風ふたばかまの襟がちつとしてゐない。踊り跳ねてゐるのである。

そこで汐千狩の女の襟に縫つてあつた圓い物が、果して佐藤君の羽織の紋と同一であつたかどうか、一同